

金諸宮調と元雜劇の韻について

高橋 繁 樹

(一)

近年、元曲の研究は多方面にわたってかなり進み、各種の翻譯、注釋、論文、辭書類の工具書も整い、研究環境も以前にくらべて飛躍的に進歩したといえる。中でも元雜劇は元刊本の研究に新たな進展がみられ、関連の論文も以前のように『元曲選』に代表される明代鈔刊本一邊倒ではなく、元刊本を主資料とするものが提出されるようになり、たいへん良好な状況になってきた。とはいえ、現状は元刊本の難解さと、三十種という数の少なさに原因して、未だに元雜劇研究の根本的資料といえる元刊本が十分活用されるまでには至っていない。研究の正確を期するためには、まず資料の性質を踏まえねばならないことはいうまでもない。

ここで基礎資料としての元雜劇のテキストについて述べる。元雜劇には、おそらくは元末杭州で刊行されたと思われる元刊本⁽¹⁾、趙琦美(1563~1624)が萬曆四十~四五年(1612~7)に鈔寫した明内府本(鐘鼓司所蔵の台本)を中心とする古名家雜劇などの内府本系明鈔刊本⁽²⁾、萬曆四三~四年(1615~6)に臧晉叔によって刊行された『元曲選』系本⁽³⁾の、大きく分けて三つのグループにわかれる。元雜劇の研究、あるいは元雜劇を用いる関連諸分野の研究には、これらテキストの認識が不可欠である⁽⁴⁾。

次に諸宮調について述べる。諸宮調の研究は、完本が董解元『西廂記諸宮調』(以下『董西廂』と略す)一種あるのみで、ほかに『劉知遠諸宮調』の殘卷、『雍熙樂府』(明郭勛編・嘉靖十年:1531)所收の王伯成『天寶遺事諸宮調』と、現存する作品が極めて少なく不完全であるうえ、しかも唯一完本の『董西廂』は難解で、田中謙二・論文「文學としての董西廂」(1954・1955,「中國文學報」第一・二冊)や凌景埏・校注『董解元西廂記』(1962年・人民文學出版社)が發表

されて以後、今日にいたるまで1976年の Li-Li Ch'en による英譯（Cambridge University Press, 1994: Columbia University Press）以外、とくに研究上大きな進展があったとはいえない。なお『劉知遠諸宮調』については東北大學中國文學研究室が田中謙二博士の指導のもとに校注（1964・東北大學文學部研究年報第十四號）を作成している。

諸宮調・元雜劇の押韵の研究は、廖珣英「關漢卿戲曲的用韵」（中國語文・1963年第4期）・同「諸宮調的押韵」（中國語文・1964年第1期）が發表されているが、あまりに時間が経っているので、當然訂正せねばならない個所がかなりある。誤りの發生した原因は、元雜劇についていえば、テキストの認識が脱落していたため明代に改編されたテキストをそのまま使用したこと、諸宮調・元雜劇雙方については曲の句格が正確でなかったことのおよそこの二點に盡きる。當時のレベルからすれば、これら誤謬は仕方のなかったことで、決して今の時點にたつて揚げ足を取ったり、非難するつもりはない。

（二）

1983年の夏、田中謙二博士指導のもとに、『元刊雜劇三十種』の解讀が始まった⁽⁶⁾。この作業は田中謙二博士の健康上の理由等で一時中斷したが、その後有志數名で『董西廂』の解讀をもって再開することになった。この作業を進るために當たって、當然これらの作品が韻文である以上、曲文の句格の判定という厄介な作業を避けて通れなかった。幸いにも『元刊雜劇三十種』には鄭騫、徐沁君、寧希元の三種の校注本⁽⁶⁾と鄭騫の曲譜『北曲新譜』があり、『董西廂』には葉慶炳の曲譜「諸宮調訂律」⁽⁷⁾がたいへん参考になった。また兩作品の校合には現在日本で見得るものはほぼ参照して校訂した⁽⁸⁾。以上、今回本論を作成するに當たり、校合、句格の判定ともに慎重に行い、『元刊雜劇三十種』は30種中9作品、『董西廂』は現時點では未發表のため稿本を用い、ほかに『劉知遠諸宮調』も資料に加え、金諸宮調と元雜劇の韵について報告したい。

對象にした元刊雜劇は、

關漢卿：新刊關目閨怨佳人拜月亭	略稱：拜月亭	曲子數：53曲
關漢卿：新刊關目詐妮子調風月	調風月	58曲
鄭廷玉：新刊關目看錢奴冤家債主	看錢奴	57曲

馬致遠：新刊關目馬丹陽三度任風子	任風子	40曲
武漢臣：新刊的本散家財天賜老生兒	老生兒	48曲
紀君祥：趙氏孤兒	趙氏孤兒	50曲
張國賓：大都新編關目公孫汗衫記	汗衫記	46曲
張國賓：新刊的本薛仁貴衣錦還鄉	薛仁貴	57曲
孔文卿：大都新刊關目的本東窗事犯	東窗事犯	62曲

上記9作品の折の總數は36折6楔子、曲子數は合計471支である。これを『中原音韻』の各韵ごとに分類すると⁹⁾、

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| 1. 東鍾 1折 | 2. 江陽 4折1楔子 | 3. 支思 1折1楔子 |
| 4. 齊微 5折 | 5. 魚模 4折 | 6. 皆來 4折 |
| 7. 眞文 5折 | 8. 寒山 — 1楔子 | 9. 桓歡 — |
| 10. 先天 3折 | 11. 蕭豪 3折 | 12. 歌戈 — |
| 13. 家麻 3折1楔子 | 14. 車遮 1折 | 15. 庚青 1折 |
| 16. 尤侯 1折1楔子 | 17. 侵尋 — | 18. 監咸 — |
| 19. 廉纖 — 1楔子 | | |

次に各韵ごとの通韵の状況について述べる。ここで注意せねばならないのは、曲の句格上、協韻・不協韻どちらも可とする個所は、当該韵以外の、通例通韵とされるものが用いられていても、通押とはみなさなかつたことだ。これを通韵とみなせば、用韵の許容範圍が廣がり、正確を期せないと判断したからだ。

[元刊雜劇の用韵一覽] ※()内は校訂後の字。韵脚の○印は不協韵。

一印は用韵の曲なし。×印は通韵なし。

- | | | | | |
|-------|-----------------|-----|-------|----------------------------|
| 1. 東鍾 | × | | | |
| 2. 江陽 | × ⁰⁰ | | | |
| 3. 支思 | 齊微：雷 | 看錢奴 | 4折綿搭絮 | ○雷○遲司耳詞思 |
| | 齊微：遲 | 看錢奴 | 4折綿搭絮 | ○雷○遲司耳詞思 |
| 4. 齊微 | 魚模：驅(驅) | 調風月 | 2折耍孩兒 | 妓日易驅(驅)○妻日利細 ⁰¹ |
| 5. 魚模 | 齊微：婿 | 調風月 | 4折喬牌兒 | 數祿婿去 ⁰² |
| | 尤侯：箒 | 調風月 | 4折掛玉鈎 | 箒處夫數○聚○餘 ⁰³ |
| | 尤侯：頭 | 薛仁貴 | 1折混江龍 | 怒突虎謀○扶○頭○笏步○虛 |
| 6. 皆來 | × | | | |

明王驥德『曲律』「論曲禁第二十三」にいう「借韻」（雜押傍韻，如支思又押齊微韻）も頻繁であるとはいえない。「13家麻—12歌戈」の「呵」「他」，「13家麻—6皆來」の「煞」などの通押は『董西廂』でも頻繁に現れる現象で，恐らくは『中原音韻』の收韻に問題があると考えられる。これらの結果は，個々の雜劇作者の出身地の違い，元末の江南地方で演じられていた實演を踏まえたテキストであること，曲文中に入聲と入聲あるいは入聲と舒聲の假借字がかなり多いことなどの方言にかかわる問題を踏まえた上での結論である。

(三)

次に諸宮調の韻について述べる。『董西廂』の宮調は194套，曲子数は579支，『劉知遠諸宮調』殘卷の宮調は80套，曲子は168支である。これを『中原音韻』の各韻ごとに分類すると，

※董は董西廂，劉は劉知遠諸宮調の略。一印は用韻の曲なし。

董		劉		董		劉		董		劉	
1. 東鍾	7套	3套	2. 江陽	8套	9套	3. 支思	11套	—			
4. 齊微	21套	15套	5. 魚模	21套	14套	6. 皆來	13套	5套			
7. 眞文	10套	2套	8 寒山・9 桓歡・10 先天互押			13套	9套				
11. 蕭豪	21套	5套	12. 歌戈	16套	7套	13. 家麻	19套	2套			
14. 車遮	18套	4套	15. 庚青	4套	—	16. 尤侯	9套	5套			
17. 侵尋	—	—				18 監咸・19 廉纖互押	3套	—			

次に『中原音韻』各韻ごとの通韻状況を一覧表にする。ただし協否均可の通押を押韻としなかったことは『元刊雜劇三十種』と同様である。

[董西廂・劉知遠(殘卷)諸宮調の用韻一覽]

※『董西廂』は嘉靖本による。一印は用韻の曲なし。×印は通韻なし。

	董西廂	劉知遠	※元刊雜劇
1. 東鍾	× ⁰⁹	庚青：朋 ⁰⁹	×
2. 江陽	×	×	×
3. 支思	齊微：裏里第妻袂七塔 ⁰⁹	—	齊微：雷遲
	伊爲		
4. 齊微	支思：思兒是事世似時	支思：是指時	×

	皆來：外 ^㉑	×	×
	×	×	魚模：驅(驅)
5. 魚模	齊微：說國批 ^㉒	×	齊微：婿
	尤侯：羞 ^㉓	×	尤侯：箒頭
6. 皆來	齊微：媒 ^㉔	齊微：雷	×
7. 眞文	庚青：病情哮喘等名情 形性聖定命生鶯 哮喘箏並驚明	庚青：並驚定明	×
			※庚青：呈(陳)
8. 寒山	廉纖：斂掩念點閃斂添 纖尖嫌 (寒山桓歡先天互押)	監咸：覽	×
9. 桓歡		(寒山桓歡先天互押)	— (桓歡)
10. 先天		※先天獨韵 3套 6支	×
	※先天獨韵 2套 2支		
11. 蕭豪	×	×	尤侯：揉
12. 歌戈	魚模：粗女汚汚撲	×	—
	蕭豪：削殼 ^㉕	蕭豪：脚作到愕廓錯	—
13. 家麻	歌戈：呵他麼嗟 ^㉖	歌戈：他	歌戈：呵他
	車遮：捨射斜奢	×	×
	蕭豪：幄剝角 ^㉗	蕭豪：角 ^㉘	×
	皆來：煞 ^㉙	×	皆來：煞
14. 車遮	×	×	×
15. 庚青	眞文：韻穩分嫩近盡門 問人信准	—	東鍾：重(動)
	侵尋：陰	—	×
16. 尤侯	魚模：祿	×	×
17. 侵尋	—	—	—
18. 監咸	江陽：踰 ^㉚	—	— (監咸)
19. 廉纖	(監咸廉纖兩韵互押)	—	×

『董西廂』の成立は、『錄鬼簿』や『綴耕錄』^㉛によると金章宗(1190~1209)の頃と伝えられており、また現存テキストも明嘉靖刊本ながら、原作の姿をかなり忠實に傳えていると推定されている^㉜。劉知遠諸宮調については残巻のみで、

作者、年代等の詳細はわからない。この二種の通押は『元刊雜劇三十種』の嚴密な押韻に對してかなり緩やかで、時期的に近接する元雜劇との差は豫想外に大きい。「支思一齊微」,「寒山・桓歡・先天」の通押などは宋詞に近いともいえるが⁹³,むしろ「眞文一庚青」,「寒山・桓歡・先天」と「廉纖」の通押からいえば、『明說唱詞話』など詩贊系作品に近い⁹⁴。

諸宮調と元雜劇は、金元という時代的接近性、口語表現多用の語り物と演劇というジャンルの接近性、使われている宮調や曲子の類似などから、兩者間の關係の緊密性が豫想されていた。しかし兩者の押韻の差は、作者層、作品群のレベルの違いを含め、文化レベルでの差異を明確に表している。もちろん語り物と演劇との違いといえば、ことは簡単だが、『董西廂』の優れた文學性、完成度の高さを考えれば、諸宮調と元雜劇との間にこれほどまで文化レベルの格差があったとは驚きというほかない。いずれにせよこの分野は未だに研究が進んでおらず、今後の研究の成果に待つところが大きい。

注

- (1) 元刊本は現在三十種残っており、當時それらはそれぞれ個別に刊行されたもので、後に集めてまとめられた。(『古本戲曲叢刊』所收『元刊雜劇三十種』)
- (2) 内府本系明代鈔刊本とは次のテキストを指す。
 - 一. 脈望館鈔校本：趙琦美(1563~1624)が萬曆40~45年(1612~7)に内府本(鐘鼓司所藏の台本)および于慎行(1514~1607)舊藏のテキストを抄寫したもの(于小穀本)とそれらをもとに古名家本などの明代諸刊本を校訂したもの。
 - 二. 古名家雜劇：萬曆16~7年(1588~9),新安徐氏刊。王驥德編
 - 三. 息機子古今雜劇選：萬曆26年(1598),息機子刊。
 - 四. 陽春奏：萬曆37年(1609),黃正位尊生館刊。
 - 五. 顧曲齋古雜劇：萬曆年間,王驥德編。
 - 六. 繼志齋元明雜劇：萬曆年間,繼志齋刊。
- (3) 『元曲選』のほか、孟稱舜評『古今名劇合選柳枝集・醉江集』(崇禎6年・1633)の二種がある。
- (4) 元刊本と内府本に関する論文：
金文京『元刊雜劇三十種』序説(「未名」第3號・1983)
小松謙「内府本系諸本考」(『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』汲古書院・1991)
- (5) 研究會の経緯及び構成員は「新校訂元刊雜劇三十種(一)」(佐賀大學教養部研

究紀要」第19巻・1987)の序文を参照。成果は拜月亭・任風子・趙氏孤兒・看錢奴・薛仁貴・汗衫記・老生兒・調風月・東窗事犯(未發表)の校注と語彙集成を「佐賀大學教養研究紀要」(19・20・21・24)に發表。

- (6) 鄭騫『校訂元刊雜劇三十種』(世界書局・1961), 徐沁君『新校元刊雜劇三十種』(中華書局・1980), 寧希元『元刊雜劇三十種新校』(蘭州大學出版社・1988)の三種の校注本があるが, 徐沁君, 寧希元の校注本は句格による句讀ではなく, 意味による句讀となっている。
- (7) 輔仁大學文學院人文學報第3期・第4期・第5期:1976。ただし初稿が完成したのは1954年とのことである。
- (8) 『元刊雜劇三十種』は上記の鈔刊本と三種の校注本, 『董西廂』は凌景埏校本のほか以下の諸本を用いた。

一. 嘉靖本 8巻 燕山松谿風逸人校:1963.9. 中華書局上海編輯所(影印) 略稱:嘉靖本 1963年發見。嘉靖36年張羽の序。

二. 適適子本 8巻 海陽風逸散人適適子重校:1957.11. 古典文學出版社(影印) 略稱:適適子本 1957年2月, 安徽省績溪縣にて發見。嘉靖36年張羽の序。序文原缺, 後人補録。

三. 黃嘉惠刻本 2巻 萬曆間刊:山東省圖書館藏。1984年齊魯書社(影印)。略稱:黃嘉惠本

四. 湯顯祖評本 4巻 天啓崇禎間刊 國學基本叢書 略稱:朱墨本

五. 六幻本 2巻 崇禎間本 閱齋叢校:1955.3 文學古籍出版社(影印), のちに世界書局(臺灣)。略稱:六幻本

五. 暖紅室本 4巻 清光緒:閱齋叢本翻刻 略稱:暖紅室本

〈その他〉『一笠庵北詞廣正譜』, 『九宮大成南北詞宮譜』, 何德修「新疆且末縣出土元代文書初探」所收『董西廂』遺文(『文物』94'10)

- (9) 元刊雜劇の韻字の資料作成に当たっては, 1993.10.17. 日本中國語學會第43回全國大會 高橋繁樹・佐々木猛「『元刊雜劇三十種』の假借字と押韻について」の佐々木猛氏の發表資料を参考にした。また『廣韻』と『中原音韻』の對照には同氏作成の稿本を参照させていただいた。

- (10) 廖論, 拜月亭第2折梁州(江陽韻)の「請」「證」(庚青韻)が通押とするが, 誤り。

拜月亭第2折梁州韻脚:※「,」印は不協韻。

陽腔項選, 狂數, 坊娘湯鄉浪床傷傷請, 當證(症), 陽

鄭騫『北曲新譜』によると, 「梁州第七」は全18句。問題の第15句と17句は, 第17句が協否均可, 第15句は數例を除いてすべて不協韻。江陽韻と庚青韻は通韻しないのが一般であり, また鄭騫『校訂元刊雜劇三十種』も不協韻としているところから, この例の第15句「請」も不協韻と考える。

- (11) 「驅・驅」『廣韻』虞韻・豈俱切。『中原音韻』齊微韵には去聲「飢」(『廣韻』

御韻)あり。

廖論, 調風月第3折中呂哨遍(齊微韻)の「刻」(皆來韻)が通押とするが、この個所協否均可のため、不協韻。

- (12) 「壻」『廣韻』霽韻・蘇計切, 『中原音韻』齊微韻に相當。

廖論, 任風子第2折正宮二煞(魚模韻)の「計」(齊微韻)が通押とするが、この個所協否均可のため、不協韻。また任風子第3折中呂三煞(齊微韻)の「軀」魚模韻通押とするが、元刊本同處に「軀」字なし。任風子第3折中呂三煞:

一投匆匆月出東, □(却)早厭厭日落西。秋鴻塞雁相催逼。玉天仙妻子權休罪。
魔合羅孩兒誰是誰。我見他搵不迭腮邊淚。問甚麼水胡花性命, 愛惜你花朵兒身起。

- (13) 「箒」『廣韻』有韻・之九切, 「頭」『廣韻』侯韻・度侯切。『中原音韻』魚模韻には平聲陽「謀浮」(『廣韻』尤韻), 上聲「母某牡畝」(『廣韻』厚韻)・「否」(『廣韻』有韻), 去聲「婦阜負戊」(『廣韻』有韻)がある。

- (14) 「呈」は「陳」の假借(原文「有甚鋪呈(陳)」), 本來「陳」で押韻しているため、眞文・庚青の通韻と見なし難い。

廖論, 調風月第1折勝葫蘆幺(眞文韻)の「誠」(庚青韻)が通押とするが、「誠」は曲辭ではなく、白(せりふ)、誤り。

- (15) 「揉」『廣韻』宥韻・汝又切。『中原音韻』蕭豪韻には上聲「剖」(『廣韻』厚韻), 去聲「覆」(『廣韻』宥韻), 去聲「茂」(『廣韻』候韻)の流攝の字がある。

- (16) 「煞」は「殺」と同音(『廣韻』黠韻)。「殺」は『中原音韻』家麻韻。

- (17) 廖論, 調風月第3折越調調笑令(庚青韻)の「中」(東鍾韻)が通押とするが、誤り。

曲中に「中」字はない。調風月第3折越調調笑令:

這廝短命。沒前程。做得箇輕人還自輕。橫死口里(裏)栽排定。老夫人隨邪水性。
道我能言快語說合成。我說波娘七代先天(靈)。※()内は校訂字。

- (18) 廖論, 東鍾・庚青重出字として「磬」を挙げるが、卷3仙呂調戀香衾は東鍾韻であるため、通押とはみなせない。このほか本論の調査結果と廖論とはかなりの相違点があるが、この用韻一覽をもってすべて省略する。

- (19) 劉知遠諸宮調19 [商調 玉抱肚]「爭拳弩踢, 殺呼叫喚, 交錯寶朋。」

韻脚: ○容○○同○濃○○鳳衆○○冲/中紅○○朋弄踪○翁從○○(凶)

「朋」『廣韻』登韻。『中原音韻』東鍾韻には平聲陰「崩」, 平聲陽「鵬」の『廣韻』登韻の字がはいっている。

- (20) 「壻」『廣韻』霽韻・蘇計切, 『中原音韻』齊微韻に相當。

- (21) 「外」『廣韻』泰韻・五會切。『中原音韻』齊微韻には去聲「會檜檜檜…」など『廣韻』泰韻の字がはいっている。

- (22) 「說」『廣韻』祭韻・舒芮切。「國」『廣韻』德韻・古或切。「批」『廣韻』紙韻・將此切, 『中原音韻』支思韻に相當, また『廣韻』養韻・子禮切, 『中原音韻』齊微韻に相當。

- (23) 「焜」『廣韻』尤韵・息流切、注13参照。
- (24) 「媒」『廣韻』灰韵・莫杯切、『中原音韻』齊微韵に相當。
- (25) 「削」卷5 [應天長]、『廣韻』藥韵，息約切。「殺」卷3 [越調・鬪鶴鶉總令・尾]『廣韻』覺韵，苦角切、『中原音韻』歌戈韵には『廣韻』の入聲藥韵・覺韵からきているものがある。
- (26) 「呵」計6例：卷1 [賞花時]・卷3 [賞花時]・卷3 [樂神令]・卷4 [賞花時]・卷4 [出隊子]・卷6 [戀香衾]
 「他」計5例：卷1 [賞花時]・卷3 [賞花時]・卷4 [勝胡蘆]・卷4 [出隊子]・卷7 [脫布衫]
- (27) 「幌」(卷1 [醉落魄總令])「剝」(卷1 [整金冠])『廣韻』覺韵，「角」(卷4 [出隊子])『廣韻』屋韵・覺韵，『中原音韻』蕭豪韵に相當。『廣韻』の入聲藥・鐸・覺韵は『中原音韻』の歌戈韵と蕭豪韵に分かれているが，例えば「學」は蕭豪・歌戈に重出しているように，その境界線は定かでない。「幌剝角」も歌戈韵の又音のあった可能性がある。歌戈韵の音があれば，家麻韵と歌戈韵の通押は可能。香港中文大學黃耀堃氏の教示による。
- (28) 「角」劉知遠諸宮調 [黃鍾宮・出隊子]
- (29) 「煞」計5例：卷1 [賞花時]・卷2 [文序子]・卷3 [賞花時]・卷4 [賞花時]・卷5 [玉翼蟬]
- (30) 「賸」(卷7 [尾])『廣韻』陽韵，『中原音韻』江陽韵に相當。
- (31) 卷27「金章宗時，董解元所編西廂記，世代未遠，尙罕有人能解之者。」
- (32) 田中謙二『『董西廂』にみえる俗語の助字』(東方學報京都 18・1950，汲古選書『ことばと文學』所收：汲古書院)には「董西廂にそうした俗語が頻見されるそのことが，一面，現存テキストが原作の姿をかなり忠實に傳えていることを物語るとも考えられる」と考察し，また「文物」(94'10)の何德修「新疆且末縣出土元代文書初探」所收の『董西廂』遺文と比較しても，明刊本がかなり忠實に原作を傳えていると考えられる。
- (33) 清・戈載『詞林正韻』第3部「5支6脂7之8微12齊15灰通用」，第7部「22元25寒26桓27刪28山1先2仙通用」
- (34) 古屋昭弘「說唱詞話『花關索傳』と明代の方言」(『花關索傳の研究』所收 1989 汲古書院)